

# 尾瀬国立公園大清水湿原の復元に向けて 2018 ～地形と植生の関係からミズバショウの移植適地を探る～

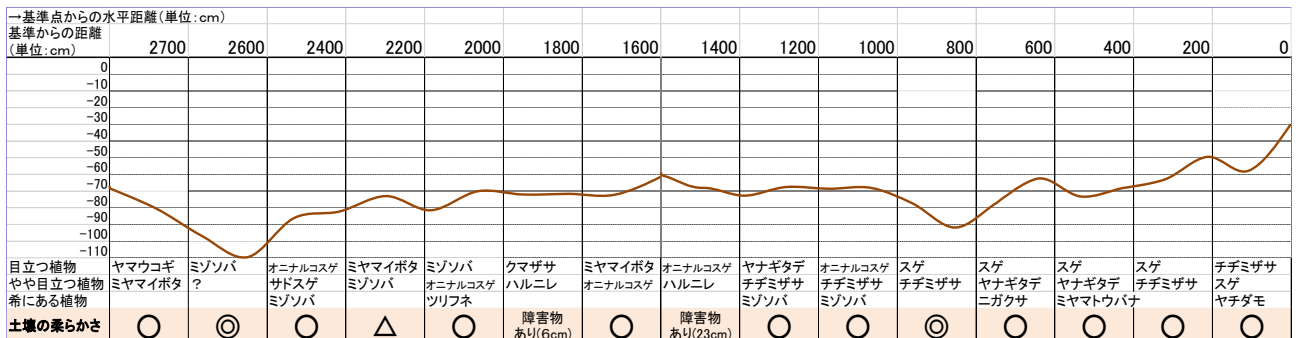
群馬県立尾瀬高等学校 理科部

キーワード：大清水湿原 尾瀬国立公園 ミズバショウ 移植 地形と植生

【はじめに】尾瀬国立公園大清水湿原はかつて2万株以上のミズバショウが大群生をなすことで有名だったが2011年にニホンジカがほとんどを食べ尽くしてしまった。これを受けて本校は2016年からミズバショウをはじめ湿原の環境を復元させることを目的に活動を始め、被害の実態やミズバショウの移植適地を探る調査を行っている。

【方法】今年シカの行動の観察を目的にした定点カメラ調査、食痕や足跡などからシカの行動を調べるフィールドサイン調査、ミズバショウが自生するには地形と周囲の植生が大きく関係しているのではないかと考えたため微地形調査の3つを行った。

【結果】定点カメラ調査より集中して短期間の間に合計9回、シカの映像が撮影された。フィールドサイン調査では5月11日に足跡が最も多く確認でき、6月29日には食痕が多く確認できた。その後、8月24日には両足跡が激減していた。微地形調査の結果は以下の表の通りで基準点から2500cm、800cm離れたところに水平基準から-110cm、-80cmの凹部と沢筋が確認されたほか、全体を通してスゲ類が多く観察できた。



【考察】定点カメラ調査からシカが観察されたが、これはシカが一度ネットを越えたことで、その後も連続したのではないかと考えた。フィールドサイン調査からシカは5月の雪解け後に活動が活発になることが改めて分かった。微地形調査では全体的にスゲ類が多く生えており、木本が多く生えていた場所にはスゲ類が少なくなっていたことなどが判明したが、移植に適した場所を見出すヒントは得られなかった。

【おわりに】定点カメラ調査とフィールドサイン調査からシカによる食害などの影響を最小限にしていくための工夫が大事であると改めて分かった。微地形調査から今後は枝や葉など真上の遮蔽物の有無や、根や岩盤などの障害物、土壌の乾燥、泥、砂、れきなどの違いなどを調べるのが肝心であることが分かった。

さいごに、調査を繰り返すうちに湿原が全体的に乾燥している様子、スゲなどの植物が繁茂している様子を見て、現在の大清水湿原はミズバショウの生育にそもそも適していないのではないかと考えた。湿原の環境が変化したのはシカによる影響だけでなく、ほかの影響もあると考え、今後はこのことについても調べたいと考えている。